



TITLE:

「講師と参加者との対話」抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

「講師と参加者との対話」抄録. 時計台対話集会 2007, 3: 97-107

ISSUE DATE:

2007-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176932>

RIGHT:

## 講師と参加者との



# 対 話

会場の参加者からの質問と、  
それに答える講師の方々の話を  
ダイジェストで掲載いたします。

会場 石出さんに質問ですが、国産材は高くても買うべきだ、そういう仕組みを作るべきだというお話に、非常に関心を持ちました。でも、住宅というと二回しか買えませんか、でも、住宅以外にも、家具とか生活小物とかも、国産材で作れるような仕組みを作るべきだと、私は考えているのですが、それについてのご意見をお聞かせいただければ。

石出 国産材で作ろうというのは、建築家が自己満足のために言っているのではなくて、国産材で建てたいというお客様との出会いがあるわけですね。そういう場を作っていくわけです。そういう場で、家具も全部、国産材で作っていいこうという

グループができております。あるいは、外国から来た材料が使えるのか、それを使うかどうかを、シックハウスの測定をしたりしながら、一棟一棟、コミュニケーションしながら決めていくわけです。それがトータルに行われて初めて、「国産材を使った」という満足のいく家ができるんじゃないでしょうか。

小池 私も、いろんな国産材で家具を作る人たちと付き合いってきたのですが、難しいんですね。例えば、スギとかヒノキを家具にすると何かべたつとした感じがして、あまり好みに合わないようなことになってしまふ。ですから、デザインとかそういうことを含めて、知恵を絞って、みんなが楽しめるものにならないといけないと思います。

会場 林野庁の方にお聞きします。林野庁のほうで、二兆二千億円の赤字があるということですね。でも、山を社会的共有財産として見た場合、例えば、放置竹林のことが非常に気になります。国有地であろうと、私有地であろうと、どんどん増殖していきますから。はつきり言つて、「ブッシュミたいに」(笑)むちゃくちゃになっています。われわれ川下に住んでいる者としては、当然、現場に入らないと、なかなか可視できないわけです。ですので、受益者負担という点からして、高知県の知事さんもおっしゃったと思うんですけども、税システムの中に組み入れたらどうか、その点についてどう思われますか。僕は、石油税とガソリン税というのを一般会計にして、全部、林野庁とか山林に回せばいいと思っています。

山田 この前のポストは林野庁計画課長で、二年間環境税にチャレンジして失敗しました。その昔、水源地治山対策室長というのをやっていたまして、そこは水源税を昭和六十年、六十

一年と二回やって、失敗しました。今やつと、高知県ほかで、森林環境税とつて、都道府県レベルで水源の対策を作っていたいています。

いずれにしても、森の整備に金が必要だという賛成意見をいただきました。ありがとうございます。私どもは、何とかして効率的に、生業で税負担なく、森の整備をしたいと思いますが、必要なお金は、皆さん方にまたご負担をお願いすることになるかと思ひます。

会場 高知県から来ました。土地改良区の理事長をやっております。竹内先生にお願いしたいのですけれども、高知県は、最近土石流が非常に激しくなりまして、砂防ダムを一生懸命造っています。ですけれども、これは本来の姿ではないと思うんです、後追いになりますから。だから、「緑のダム」という考え方があると思いますけれども、この「緑のダム」の評価には、森林の保水力の評価が必要じゃないかと思ひます。これ



については、評価はどの程度できているのかどうか。それともし、緑のダムがきちんとした評価をされるのであれば、林野庁にもうちよつとお金が回ると思いますが、いかがでしょう。

竹内 その評価について、私はそれほど知見はないのです。でも、緑のダムというのは何か、と考えますと、実際、水を蓄えるのは木ではなくて、その土壤だと思います。スポンジみたいな土壤があれば、水の蓄積はあり得ないわけで、そのためにも森の整備というのは絶対に必要だと思います。土砂を流してはいけないと砂防ダムで止めても、先ほど尾池先生からもお話がありましたように、山地は着実に風化していくわけで、いくらでも土砂がたまります。そうすれば、どこかでバランスが崩れて、すべつてしまいます。だから、無理やり全部止めるのではなくて、着実に流しながら、しかもちゃんと土を蓄えていく、そういう森をどう作っていくか、そのとき初めて緑のダムが完成するんだらうと思います。山が緑色になったから緑のダムになるのではなくて、森林総体としてちゃんと森にな

ったときに初めて、緑のダムというのが機能するわけです。一方で、人工林の間伐を放棄しておきながら緑のダムだというのは、あまりにも虫がよすぎるだらうと思います。答えになっているかどうかわかりませんが。

会場 大阪から海の漁協の組合長と一緒に参加させていただきました。尾池総長が、土が肥えているのが日本の特徴だというお話をされました。農業と漁業と林業が一緒になって、この日本の土壤の形成をしてきたという歴史の中で、人のつながりという意味で、農業組合、森林組合、漁業組合のような人のつながり、それを生業としている人たちのつながりで、何か先進的な事例があれば教えていただきたいのですが。

田中 先進的事例を、まさにこれから作り出そうというのが高知での取り組みということになります。高知県は、先ほど

もご質問にありましたように、森林率が非常に高く、土石流が起こるような人工林が、間伐されないままに放置されています。それを大規模に、実験的に広域に間伐をして、そのことが川の再生にどうつながり、海の再生にどうつながるかという、循環の仕組みを明らかにすることによって、その地域の共同体意識、流域の共同体意識を作ろうとしています。これが、「安心・安全な社会」を作る一つの非常に大きなキーということになるでしょう。

それから、今日のパネルディスカッションでも論議された、間伐した木を、枝も葉っぱも余すところなく全部使う。そういう方法を工夫をして、高知で盛んなハウス栽培を重油燃料ではなくて木質ボイラーに替えて、そして林と農がつながるシステムを作る。さらに、コンクリートで作った魚礁ではなくて、それはもう機能をなくしてしまつたら邪魔者でしかなくなるわけですが、それに対して京都府では、間伐材で作った人工魚礁を作つて、そして網を引っ張り回して乱獲にならないように、零細な漁業者が行けば確実に魚が釣れるような仕組みを作る。そうするとそれは、林と漁業とのつながりができる。

そういうかたちで流域全体の循環のシステムができるのではないかと思います。

そこに、「森里海連環学」がどんなふうに貢献できるかということになりますので、これから尾池総長にもお願いをして、そういう研究費を付けていただく算段をして、十年を目標に、まず研究としては五年単位で、チャレンジをしようというのが今の計画です。五年待つていただければ答えが出てくる、ということでしょうか。

会場 地元で建設業を営んでおります。小林先生への質問なんです、大学の研究者の方が「みんな一緒に生きていくうね」というようなご発言だとか、そういう趣旨のことを言われることに大変な感動を覚えております。jPodの持つ可能性についての質問なんです、公営住宅、府営住宅、市営住宅、そろそろ建て替え時期に来ておまして、スラム化が心配されております。今、jPodは二層で試されていると

いうお話でございましたけれども、京都に似合うのは多分、五層ぐらいまでかなと思っておりますけれども、iPodを活用して、兵庫県のように、京都の府営住宅だとか市営住宅を建て替えていくのに、尾池総長、お墨付きの工法であれば、京都市民は安心します。われわれ、アリとキリギリスで言えば死にかけているキリギリスのような業界ではありますけれども、その辺、地元建設業界を、iPodを切り口に指導していただけるような可能性はございますでしょうか。

小林 私 は、木の「何に」関心を持っているかというと、そんなに高い建物が作れないということがいいなあと思っているんです。三階建てぐらいまでは努力しますが、それ以上はやる気はありません。木より高いものを造る必要はない。で、どういところで造ればいいかと言ったら、里山とかそういう森が近いところです。町の中よりは、子供を育てる環境にいいところ。そういうところは、木もよく、ちゃんと育っています。

要するに、人間が勝手に、頭で考えたものは大体裏付けが

ないですね。ですから、自然から教えてもらう。これしか、もうありません。私は、テキストはなくしてしまっていると思っただほうがいいと思います。

京都では、間伐材をほとんど使っていないですよ。なぜか、失敗を二つお話します。京都では、銘木とか名人とか、宮大工とか、一部の人のために高い材料を使ってやる技術しか残さなかったのです。もつと、白川村の合掌造りのように、みんなで縄でしばってやるような技術があればよかったのです。粗雑だけど、この技術ならみんなが伝承できるわけです。家を建てるというところに、少しでも、一緒になってやるという考え方を持っていないと、あなただけが一番、トップの技術レベルを持った瞬間から、技術は伝わらなくなります。消えていきま

す。

京都が持っている優れた文化があります。でも、木の文化に関しては、経験とか時間をかけて、みんなに広がっていく部分を大事にする必要があるのでは。そこら辺のことを忘れて、いわゆる機械を使って、素早く、効率よくというところに走っていくと、里山で、子育て世代に家を作ってあげようという発



想が果たして出てくるかなと。参考になればと思います。

天野 京都府が、「社団法人京都モデルフォレスト協会」というのを作ろうとされています。来年の二月に、私も第一回総会でお話しさせていただくことになっています。先ほど、小池さんが兵庫県をほめました。間もなく、京都府がほめられるんじゃないかなと思います。九州の森林管理局長、山田さんの表を、皆さん、思い出してください。京都府は四十二番目にしか、間伐材を使っておりません。多分、京都大学の jPod 工法は、京都府が採用されて、モデルフォレスト協会などが、最初はモデル林を作りながら、次第に京都の周りの山を間伐していく、その間伐材で jPod の家を造る。そういうことが、これからどんどん進んでいくというふうに想像しています。

会場 新潟県から参りました、建築の設計をしております。

新潟では、昨年、大きな地震に見舞われました。その山古志

村で、住宅の修復等にもかかわっているんですけど、わずか三百メートルぐらい離れたところの、スギ山の一角とブナの山の一角、これの崩れ方が、同じ震災にもかかわらず、全く違うんですね。スギ林はどちらが天を向いているのかわからないぐらい崩れながら谷底に下がっています。ブナ林は地震のあと、何事もなかったかのように見えます。そのブナ林の中の切通しの道だけが、村役場に行く道として数カ月、機能していました。

そんな状況の中で、広葉樹を植えようかという思いも、村の方と話をしているんです。間伐をして日本の山を再生させるということが、今日、メインでお話しになっていたわけですが、けれども、そういう広葉樹、かつては日本の山にもクリやらケヤキやらというのがあつて、それなりに用材として非常に珍重されて、使われてきたわけですけども、そういった広葉樹を植えるというふうなことに関して、どのようにお考えなのか、お聞かせ願えればと思います。

竹内 広葉樹を植えること、特に反対はしません。けれども、広葉樹の人工育林というのは正直言つて、歴史がないのです。スギ、ヒノキの育林の歴史は、先ほども申しましたように、五百年以上の歴史を持っています。

実は私も、和歌山研究林勤務時代に、重要種の広葉樹を植えてみました。しかし、まだやつと十数年、二十年弱にしかなっていない。そこまでのことはわかります。でもここから先、広葉樹の育林がどうなっていくのかというのは、見えていないというのが現実です。

ブナの天然林、確かにしっかりといただろうと思います。一つは、どういうところに生えているブナ林かということです。もともとスギというのは一番滑りやすい土と水の集まるところに植わっています。だからある意味、一番崩壊しやすいところに植わっています。だからこそ、きちんと管理しなければいけません。その点、天然林の場合はいろいろなところに残っています。一番壊れにくいところに残っている天然林であれば、まず少々の災害では壊れないのが当然だろうと思います。

いろんな広葉樹をうまく植えていけばいいと思うんですけ

れども、一種類の広葉樹だけを植えていくというのは、私は極めて危険があるだろうと思います。例えば、今日もお話ししましたけれども、ナラ科の樹木は、今、猛烈な被害を受けています。被害は、何時起こるかかわからないわけです。近年でも、一九六三年には日本全国からクリが消えるのではないかとというぐらい、クリが大被害を受けています。何が起こるかかわらない。だからこそ、多様な森を、ちゃんと多様なままで残していくというのが、極めて大事なだろうとは思っています。

でついでに言いますが、先程見せましたように、天然林、自然林と自然林に近い二次林は、国土の四分の二程度しか残っていません。これはもう大事に、やはり国民の財産として、もう手は付けないでいいだろうと、私は思っています。

答えになったかどうかわかりませんが、あまり性急に広葉樹、広葉樹に動いていくのは、それなりに私はまた、危険があるだろうというふうに思います。

山田 広葉樹、大いに植えていいと思います。私は大分県庁に四年間、出向していたんですけれども、平成三年の台風被

害で、かなりのスギ林がやられました。そのとき平松知事は、もう、同じスギばかりを植えさせない、一割、絶対に広葉樹を入れないと補助金を出さないと、だいぶん頑張っていたらついにしました。そして広葉樹を植えましたが、なかなか目立たないというのも事実だと思います。けれども、竹内先生がおっしゃったように多様な森を作っていくことは非常にいいことだろうと思っています。

一点だけ追加しますと、かなり前に思ったことですが、広葉樹は残ってスギ林が崩れている話がありましたけれども、スギは表土がいつばい乗って、水分があつて、通気性がいいところに植えています。残っている広葉樹林は、岩山だったからスギを植えていなかったところです。外から見ると、広葉樹が残ってスギ林が崩れている。でもそれは、崩れるべきところが崩れていて、残るべきところが残っていたというだけの結果です。それが、マスコミの、テレビで見ると、いかにもスギ林がだめで、広葉樹がいいというふうに見えるということかもしれません。

で、これで、第3回時計台対話集会「森里海連環学が、日本の木文化を再生する」をお開きにさせていただきたいと思います。ご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。

白山 どうもありがとうございました。時間になりましたの

※本文中の肩書きおよび年月日等は、

平成18年12月23日に講演いただきました内容を  
そのまま使っております。ご了承ください。